

生徒発表

課題研究における地域連携の取組

これまでの事例と本年度「仁尾町の活性化デザインの取組」について

香川県立善通寺第一高等学校 デザイン科 3年

大本 廣貴・宮武 小夏・森川 砂海・新池 なつき・吉川 初音

1. これまでの地域連携の事例

平成19年、善通寺西高等学校との統廃合により、それまでの普通科に併設される形で本校デザイン科が生まれ、私たちは6回目の卒業生となる。

3年次の課題研究の授業において、地域と連携したデザインの取組を行っている。以下が、これまでの課題研究の実践の概要である。

○ 1期生（平成21年）は、隣町の琴平町社会福祉協議会および琴平町農政課と連携し、特産物のニンニクを使った、ガーリックオイルのネーミングとパッケージデザインの制作を行った。商品化され生徒作成の広告ポスターも採用され、金刀比羅宮参拝の観光客の人気土産物となっている。



○ 2期生（平成22年）は国立善通寺小児病院との連携により、同病院における、ホスピタルアートの取組を行った。これは、前年度に同病院で企画された壁画制作に放課後生徒たちが参加したことで縁を持ち、本校より依頼し、実現した取組である。

○ 3期生（平成23年）は、地域子育て支援NPO法人「くすくす」との連携により、0～3歳児のための遊具制作の取組を行い、完成作を寄贈した。赤ちゃんや子どもとふれあい、試作品で遊んでもらいながら、デザインの検証を行い、善通寺市の子育てフェスタというイベントにも参加し、完成遊具について広く披露を行った。

○ 4期生（平成24年）は、善通寺市との連携により、学習教材「空海行状絵伝」の制作に取り組んだ。生徒たちの描いた24枚の行状絵は、平成26年度より、善通寺市の小学6年生の授



四国新聞 2014年5月21日付

業である郷土学習「空海学習」テキスト挿絵として採用されている。

○ 5期生（平成25年）は、善通寺市建築土木課との連携により、JR善通寺駅前広場モニュメントを考案した。班編成によるプレゼンを経て、150万という予算の中、素材や形に折り合いをつけ、善通寺市の天然記念物のオニバスをモチーフとしたベンチ型モニュメントのアイデアを実現させた。



2. 本校の課題研究の授業形態

デザイン科は各学年35人の定員1クラスで構成されている。課題研究の地域連携では、設定した1つのテーマを全員で取り組み、プレゼンテーションやグループワークを通し、企画の実現を図っている。企画が実現していく背景には、私たちに寄せる地域の方々の期待がある。それに応えるための深い学習の必要性から、専門家や大学教授に学校に来ていただき、助言を求めている。

3. 平成26年度課題研究

～仁尾町の活性化デザインの取組～

(1) 仁尾町との出会い

学校から15km離れた海岸沿いにある三豊市仁尾町の「まちづくり推進隊仁尾」の方々に連携依頼を行い、仁尾町の活性化デザインに取り組んだ。昨年度、仁尾町にある蔦島の観光案内看板を依頼され、制作した縁がある。

(2) 町が必要としているものを探すための行動

これまでの本校の課題研究の事例では、地域から依頼される場合も、連携を依頼する場合も、

企画の実現を前提としているため、絞り込んだテーマ設定が行われてきた。しかし「町の活性化」という漠然としたテーマを掲げた私たちは、デザイン対象物を町の中から発見するところから始めなくてはならない。土曜日に私たちは、互いに誘い合い、仁尾町を訪れ、町の人たちに質問をしたり、人を紹介してもらったりして、現地取材を始めた。

私たちが町を訪れて感じたのは、自然の美しさ、人の優しさ、ゆったりとした優しい町の音で、「豊かさ」そのものだった。しかし、町の人に町について聞いてみると、「若い者が出て行く」「なにもない」という答えが返って来たのだ。いや、町は、豊かさをすでに持っている。活性化の企画としては、商業的なイベントなど、一時的にお金と騒がしさとゴミを落とすしていくようなものはそぐわない。私たちが提案すべきデザインの方向性は、町の持つ豊かさを、誇れるものとして、住民の方々が再認識できるものであるべきだと考えた。

(3) 5つの班編成によるデザイン案の提案

5つの班をつくり、以下の案を「推進隊仁尾」の方々に提案を行った。

① 「人」にスポットを当てたパンフレット

人をつなぐのは人。地域の未来を作るのは人。パンフレットに取り上げるのは、有名で立派な人じゃなくて良い。普通の人が良い。住民の方々と出会った時に私たちが感じた「あったかさ」をパンフレットにしたい。

② 親から子へ語り継ぐ町の絵本

時を越えて大人から子どもへと語り継ぎ、つなげていくものを作りたい。仁尾を訪れた子どもが、町の良さを発見していく設定の中で、残したい風景や語り継ぐべき町の歴史を絵本にして展開する。

③ 蔦島を花でいっぱいにするプロジェクト

島を訪れた人に、種をまいたり花を植えたりしてもらおうイベントを企画する。島の小高い丘

から、海と花畑が広がる風景が作れたら素敵である。植物の生長を楽しみに再び人が訪れると考える。

④ 仁尾のやさしい回覧板プロジェクト

回覧板は人の手から人の手へとつなぐものであり、ここにコミュニケーションを生じさせるデザインを考える。例えば、モザイク壁画の様に、全地域の回覧板を役場に並べると1枚の大きな仁尾の風景になるというのはどうか。

⑤ 仁尾の歴史と誇りを形にするプロジェクト

町の繁栄の証として残る屋号を、吊り下げ旗にして設置する。また、町に残る伝説の物語を絵本や紙芝居にする。

(4) 地域と関わるための行動力と責任の気付き

これらの提案のプレゼンテーションは、地域活性化の取組とは何かを知るために外部講師として招いた先生方にも聞いていただいた。地域デザインに詳しい、東京都在住のデザイナーの栗坂秀夫先生。そして小豆島で地域おこしに取り組んでいる真鍋邦大さん。「おとなは無理だって言うんだよ！信じちゃいけないよ！全部やるべきだよ！」という真鍋さんのお言葉。その場で「推進隊」の方々を説き伏せるエネルギーに驚かされた。認めてくれたうれしさもある反面、必要となる膨大な行動力とその責任を感じ、少しひるんだ。地域と関わることはその場限りでも、人任せでもなく、私たちがどれだけ責任を持ってその町と関わるのかということだと気付いた。そして私たちにできる取組は何だろうと、全員で自分たちのアイデアを再検討した。その結果、「吊り下げ旗による屋号の町プロジェクト」に全員で取り組む事を決めた。

(5) 吊り下げ旗による屋号の町プロジェクト

仁尾町は、かつて商業港として繁栄した歴史を持つ町である。数多くの問屋や商いを営む人々で賑わっていた。その繁栄の証が、家々に屋号として残っている。その屋号を吊り下げ旗にあしらい、各戸に設置し、町の誇りにしても

らいたいと考えた。吊り下げ旗は、シンプルで時代を超えて使用されている機能性を持っており、看板や表札、暖簾といったものより、肩肘張らず、身近な感じがあり、町の風情とも合うと考えた。旗のひらめきによって、町に吹く風を目に見える形にしたいと考えた。

(6) 町の人たちへのプレゼンテーション

さて、何よりも大切なのは町の人たちの同意を得ることである。まず、私たちの提案を町の人たちに知ってもらう機会を作る必要がある。仁尾町には毎年9月に、子どもたちの成長を願った「八朔人形祭り」という祭りがある。この場に本校の参加場所を確保し、人形にまつわるワークショップの企画と今回のプロジェクトのプレゼンテーション企画の同時実施を「推進隊」の方々に依頼した。ベニヤ板大のパネル6枚をつなげたものに、半分に吊り下げ旗を設置した仁尾町の通りの風景を描き、もう半分に取組の意図と、吊り下げ旗のデザイン案を提示し、プレゼンテーションボードとした。

このプレゼンテーションボードは「まちづくり推進隊の方々のご協力により、その後三豊市役所仁尾支所のロビーに長く展示いただき、広く町の方々に知っていただくことができました。



(7) 吊り下げ旗の製作と完成

屋号については、町の団体のいくつかは、以前より調査研究を行っていて、300軒程の屋号が浮かび上がっているとのこと。仁尾の繁栄を物語る数字に感銘した。吊り下げ旗を作る軒数や所在場所をどうお願いすべきか。町では、「な

つかし味巡り仁尾」という、ガイドがついて1時間半程の時間をかけて徒歩で町を案内するイベントが、週末ごとに行われている。そのルート沿いの、古くから屋号を持つ30軒について、吊り下げ旗を製作し、完成後はこの町歩きイベント実施日に吊り下げ旗を軒先に吊り下げていただく了解を取り付けた。

さて、吊り下げ旗の製作手法であるが、古い町並みの伝統的建造物に合う上品さと、風に軽やかにひらめき、裏返っても美しく見えるものであるべきと考え、染色技法で製作を行うことにした。私たち生徒も先生方にも染色の経験を持つ人はいない状態だったが、型染め作家の津田浩二先生より実技指導をいただける機会を得て、リアック染料を使った型防染の技法を教わった。型紙には本来は柿渋紙を用いるのだが、私たちは、耐水性に優れているユポという合成紙による代用を思い付き、試作を通し良好な結果を確認し、経費の削減を図った。さて、教わった通りの各工程を丁寧に行ったにもかかわらず、白く抜ける文字の境目のところで色が変色する失敗が起こった。染めを防ぐための糊の異変に気付いていた。染めの途中、乾いていたはずの糊が、べたべたと刷毛にまとわりつく感触があったのだ。試行の後、市販の糊とリアック染料との相性が悪いことが原因と判明し、最終的には津田先生手作りの糊を使用させていただき、美しい満足のいく染め上がりを得ることができた。30枚の染色について3回の失敗を繰り返した末のことで、喜びもひとしおだった。染色は、気温、湿度、時間、素材と薬品の組み合わせなど、様々な要素が複雑に影響しあうことを知った。

そして町の方々のご協力により、仕上がった30軒分の屋号の吊り下げ旗をクラス全員で仁尾町に設置することができたのである。

(8) まとめ

自分たちの想いだけが独走して町の人の気持ちを置き去りにしてしまったら、やればやるほど本来の行くべきデザインから外れてしまう。「町がもともと持っている良さを見つけて形にする」ために、「町が持つ価値に辿り着けているだろうか」「町の人が望むものになっているだろうか」と、私たちは常に自分たちに問いかけた。町の方々と言葉を交わし、想いを一つにしていく過程で町の魅力を発見し、アイデアが生まれた。町の方々とのお話が私たちを進むべき方向へと後押ししてくれ、また、考えが至らない部分にも気付かせてくれた。

デザインで大切といわれるコミュニケーションの実践は、自ら町へと足を運び人とふれあうことだった。デザインは、対象となる相手の思いをくみ取り思い図る思考の作業であり、そしてそれを形にして検証する作業である。私たちの取組の是非や発展性はどうか。週末に行われている「なつかし味巡り仁尾」の沿道に足を運び、検証をしたい。



工業教育資料 通巻第 361 号

(5月号) 定価 216 円 (本体 200 円)

2015 年 5 月 5 日 印刷

2015 年 5 月 10 日 発行

印刷所 株式会社インフォレスト

©  実教出版株式会社

代表者 戸塚雄武

〒102 東京都千代田区五番町 5 番地
- 8377 電話 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>